

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02421

研究課題名(和文)「第二の自然」から照射する人間の自然性と社会性：「脳・心・教育」プログラムの精査

研究課題名(英文) Human Naturalness, Human Sociality and Second Nature: Examining Two Variants of the 'Mind, Brain and Education' Programme

研究代表者

三澤 紘一郎 (MISAWA, Koichiro)

群馬大学・共同教育学部・准教授

研究者番号：20636170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、前回プロジェクトにつづき「規範性をもった自然的存在」である人間をより十全に理解することを目指し遂行された。以下の二つが主な研究成果である。①：自然科学的人間像に還元されない人間理解を描出する哲学的人間探究の道筋の一端を明らかにしたこと；②：言語化されないままに働く理性について、その特質と射程に関わる研究を推進したこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のいっそうの自然科学研究の進展により、人間理解の中心は、人間の動物的自然性に基づく自然科学的人間像に占められつつあり、その影響は教育領域にも及んでいる。しかし教育研究においては、このような「自然主義」の特質を見定めて、乱立する個別研究の意義と限界を明らかにする研究が、国内外を問わず、決定的に欠けている。本プロジェクトは、自然主義をもっとも積極的に検討してきた分析哲学の展開を足掛かりに、教育と自然主義の見通しづらいつら関係を理論的に解きほぐし、より建設的な教育研究、教育理解の方向性の一端を提示した。

研究成果の概要(英文)：The main aim of this research programme was to clarify the conception of human beings as natural creatures in a normative environment. Drawing mainly on the work of John McDowell and David Bakhurst, this programme also aimed to develop a critique of the prevalent, natural-scientific understanding of human beings as natural animals. The results from this four-year project are the following: 1) that a proper appreciation of the notion of second nature allows us not to separate human nature from our animal nature, thereby making it possible to bring the issue of human nature (again) within the scope of the philosophical study of education, and 2) that a McDowellian-Bakhurstian view of our natural life-form enables us to see that the rational-conceptual capacities that can be deliberately exercised with explicit self-consciousness are also operative when one does not exercise the ability to step back or when one engages in activities where nothing is discursively explicit.

研究分野：教育哲学

キーワード：人間本性 人間の自然性 第二の自然 規範性 理性 知覚 John McDowell David Bakhurst

## 1. 研究開始当初の背景

(1)「脳の構造に基づく学習 (brain-based learning)」や「神経教授学 (neuro-pedagogy)」といった学習理論や教授方法は、もはや教育分野において目新しいものではなくなっている。一部の欧米社会から一気に日本に流入し、日本の教育政策、研究、実践を席卷している「エビデンスに基づく教育 (evidence-based education)」を思い起こせば、これらの「人間の動物的自然性」に依拠した教育研究や理論がますます日本でも影響力をもっていくことは十分に予想される。

(2) 一方で教育分野には、「人間本性＝人間の動物性」とみるかのような自然主義 (naturalism) に対する拒否感も強く、人間の自然性に対して人間の社会性を対置することによって、自然主義に包摂されない領域を擁護する研究が数多く生み出されている。しかしながら、人間の自然性に着目する自然科学的研究と人間の社会性に焦点を置く研究 (例えば社会構築主義) とは、そもそもの人間観を共有しておらず、「規範性をもった自然的存在」である人間を包括的に理解する契機を欠いていると言わざるを得ない。

(3) そこで研究代表者は、人間の自然性と社会性の両者を射程に収める「第二の自然」(second nature) という、アリストテレスに端を発し、近年ジョン・マクダウェル (John McDowell) が再び息を吹き込んでいる概念に着目し、人間の自然性と社会性の相互作用や影響関係の機構を明らかにする試みを展開してきた。これらの研究により、人間が後天的に獲得する「第二の自然」は、人間にとって自然の一部であり、それどころか「第二」でありながら人間の具体的な生の根幹にあるという点で「原初的」でさえあり、理性や規範性の源泉であることを示してきた。しかし、人間の自然性と社会性という二元論的な枠組みを前提として、その相互関係や影響関係を架橋しようとするだけでは不十分であるという指摘も受けてきた。

(4) したがって本研究は、自然性の領域の外に措定される社会性ではなく、「第二の自然」の自然性とともにもたらされる人間の原初的な社会性とはどのようなものであるかという問いを中核に据える。「社会性」に関する研究は枚挙にいとまがなく、研究代表者も複数の「社会認識論」の検討や、さまざまなバリエーションをもつ社会構築主義における「社会性」概念の整理などを行ってきた。しかし、社会認識論も社会構築主義も、「人間本性における社会性」という人間の原初的な社会性に十分に切り込んでいるとは言い難く、人間の自然性との関連性もほとんど顧みられていない。そのため、研究代表者は「第二の自然」とその関連概念である「理由の空間 (the space of reasons)」を援用しながら、「人間本性における社会性」、ならびにそこに不可避的に含まれる人間形成という教育的側面とのつながりを明確にする研究に取り組むことを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、人間本性 (human nature) を「第二の自然 (second nature)」の視座から再検討し、別個に研究対象とされてきた人間本性と人間形成が切り離されない包括的な文脈を提示することである。「規範性をもった自然的存在」である人間を十全に理解することは難しく、特定の自然観や社会性概念に基づいた研究は、それぞれには有用なものであるとしても、教育という多面的で重層的な営為と安易に結びつけることには慎重を期す必要がある。

そのため研究代表者は、本研究において、「第二の自然の自然主義」を手がかりとしながら、①人間の自然性、②人間の社会性を二分化させることなく検討し、その理解のもとに、③現在権勢を誇る実証／科学的教育研究の典型である「脳・心・教育」プログラムを精査する。(＊本研究の「脳・心・教育」プログラムとは、2007年に創刊された学術誌 *Mind, Brain and Education* (『心・脳・教育』) において象徴的にみられるような、人間の動物的自然性に関する実証／科

学的研究に基づく一連の教育理論や実践の展開を指す。)

### 3. 研究の方法

研究の主な手法は文献精読である。対象となる文献は、以下の4つの分野にわたる。①分析哲学関連、②教育哲学関連、③教育研究関連、④自然科学関連。

### 4. 研究成果

本研究期間内に発表された学術論文(下記5)のうち、特に本プロジェクトとの結びつきが強い3篇の概要を略記することで、研究成果の報告とする。

〔雑誌論文〕

(1) ‘The pervasiveness of the rational-conceptual: an educational-philosophical perspective on nature, world and “sustainable development”’. (2021) *Ethics and Education*, 16(3), 289–306.

本論文は、下記(2)のテーマを引き継ぎ、自然科学的自然観の見直しを提唱するM・ボネットの現象学的アプローチとJ・マクダウェルの分析哲学的アプローチの比較、対話、精査を行ったものである。本論文は、その焦点を人間経験の最も原初的な、言語化を伴わないレベルおよび人間の具体的な行為レベルに移し、両者に働く人間の能力(human capacities)の性質の異同と関係を検討することを通じて、「世界」に関与するという広い意味での「実践」を豊かにする道筋をつけることを目指す。

本論文は、「言語化以前」の経験や没入的経験から言語的・理性的な思考・判断の段階への移行はいかにしてなされるかというボネットや(同じく現象学に依拠する)H・ドレイファスの問いは方向性を間違えていることを論じ、人間の理性的概念能力(rational-conceptual capacities)は、知覚のレベルでも行為のレベルでも、あるいは没入時にも、同じように働いているという主張をマクダウェルの議論を検討しながら打ち出す。言うまでもなく、知覚経験や没入時の経験のほとんどはその場での言語化・命題化を伴わない人間経験である。しかし、言語化・命題化に関わる「高次の」思考や判断に働く人間の能力は、「地下一階」の知覚や没入経験においても働いている。それゆえ、われわれはアリストテレスのフロネーシス(実践的思慮)のように、言語を必ずしも伴わなくてもある状況の意味や意義を瞬時に「見てとる」ことがときとして可能である。

ボネットは、政策としての‘sustainable development’ではなく、人間存在の‘sustainable development’として、この「地下一階」のレベルでの教育の可能性を模索する。それは実践知の涵養という極めて重要なプロジェクトに結びつき得るが、そのためには、「地下一階」の感覚経験の段階から「第二の自然」が浸潤している人間の生のありようをより十全に捉える必要がある。われわれにとっての最大の「変容」は、「地下一階」から「高次」への移行ではなく、そもそも「世界」に参入するところに求められること、その理解のもとにのみ「実践」を豊饒なものにするための実践知や実践理性を彫琢する道が拓かれ得ることを本論文は主張する。

(2) ‘Nature in our experience: Bonnett, McDowell and the possibility of a philosophical study of human nature’. (2020) *Studies in Philosophy and Education*, 39(2), 135–150.

自然科学的自然観とそれに基づく教育理解に対して、自然概念の見直しならびに人間観の刷新という観点から四半世紀以上にわたって鋭い批判を向けてきたのが、英国の教育哲学者M・ボネットである。ボネットは、主にM・ハイデガーとM・メルロ=ポンティの現象学的議論を援用することにより、人間と教育を「環境」という視角から照射する論考を送り出してきた。

科学的自然主義にも、社会構成主義やいわゆるポストモダニズムにも与さないポネットの教育環境論は、教育哲学、教育人間学、環境教育分野を中心に多くの支持を集め、教育実践にも大きな影響を及ぼしている。

本論文は、ポネットの現象学的自然論と、ポネットが肯定的に評価する J・マクダウエル の自然概念を対話させ、その異同と相補性を吟味したうえで、人間本性についての哲学探究の今後の展望を描き出そうとするものである。本論文は、ポネットの現象学的自然論を高く評価する一方で、彼の自然 (nature) 探究は、われわれの自然・本性 (human nature) に関しては十分に切り込めていないことを指摘する。その大きな要因は、「原因 (cause)」と「理由 (reason)」の二項対立の近代的図式をポネットが暗黙に受け入れているために、人間の知覚や認知活動をめぐる実証科学研究を人間理解についてのより広い文脈の中に適切に位置づけられない点にあることを炙り出す。

感覚受容器においてすでに概念能力が現実化されているというマクダウエルの論点は、人間の自然性と規範性を human nature において対置させない探究の可能性、すなわち自然科学的研究を等閑視することなく人間本性についての哲学探究を進める可能性を秘めていることを、本論文は明らかにする。

以上のような議論の過程で、S・ボルターの「生物学的観点からの教育」という近年のアイディアを本論文は批判する。ボルターは、社会文化的な観点にも目配りをしているものの、その観点は、社会文化的な要素が人間の動物的自然性の中にもすでに浸透しているという重要な点には及んでいないためである。

(3) 'On what we call the world and human experience: Rorty, McDowell, and a socio-historical genesis of human naturalness'. (2020) *Mind, Culture, and Activity*, 27(1), 19–35.

本論文は、われわれが何気なく「世界」と呼んでいるものが実際には人間にしか現れ得ないものであることを、外部環境からわれわれへの作用である感覚経験のような、人間経験のもっとも根源的なレベルから検討しなおすことを通して明らかにする。その目的は、「心と同時に世界像を獲得することを可能にするものとしての教育」という、人間の生の根幹にある教育的側面、変容的側面を浮かび上がらせることである。

本論文は、L・ヴィゴツキーや E・イリエンコフ等によるソヴィエト心理学や哲学に由来する文化歴史的研究と、近年の英米圏の分析哲学に見られる人間存在の社会性へ着目する議論（特に、R・ローティと J・マクダウエルの議論）を架橋しながら進行する。「社会性」への傾斜が行き過ぎ「客観性」の放棄を主張するようになるローティに対して、マクダウエルは、人間と世界の内在的なつながりの「客観性」（および「独自性」）を擁護する。マクダウエルの議論を敷衍すれば、「第二の自然」獲得後は）人間の動物的自然性の中にすでに「第二の自然」が浸潤しており、感覚経験の段階から人間は、意味、価値、理由といった人間独自の規範的な文脈と「客観的に」繋がっているということになる。ただし、マクダウエルの議論は分析哲学の伝統的な問題設定に枠づけられており、ソヴィエト流の文化歴史的研究が志向してきた規範的理論探究と経験科学的なアプローチの接続というダイナミズムには踏み込めていない。

そのような学際的なダイナミズムを具体的に生み出す可能性をもつ議論として、次の二つの取り組みを有機的に発展させることに今後の展望を見出して本論文は閉じられる。一つが、D・バクハーストの「変容理論」であり、もう一つが D・マッカーサーの「リベラルな自然主義」である。どちらの議論も、われわれのうちに物質肉体的な動物としてのヒトと、理性的な主体としての人間が引き裂かれるように分岐して存在しているわけではないことを論じており、自

然科学的アプローチとは別様に人間、経験、教育を「客観的に」捉えなおす道があることを強く示唆している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Misawa Koichiro	4. 巻 16
2. 論文標題 The pervasiveness of the rational-conceptual: an educational-philosophical perspective on nature, world and 'sustainable development'	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ethics and Education	6. 最初と最後の頁 289 ~ 306
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17449642.2021.1908647	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三澤 紘一郎	4. 巻 125
2. 論文標題 教育と徳理論 序論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 100 ~ 102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三澤 紘一郎	4. 巻 121
2. 論文標題 リベラルな自然主義の展開と人間の自然性 自然・規範・教育の再定位	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 93-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Misawa Koichiro	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Modern Science, Philosophical Naturalism, and a De-Trivializing of Human Nature	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Philosophy of Education 2017	6. 最初と最後の頁 565 ~ 578
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Misawa Koichiro	4. 巻 27
2. 論文標題 On What We Call the World and Human Experience: Rorty, McDowell, and a Socio-Historical Genesis of Human Naturalness	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Mind, Culture, and Activity	6. 最初と最後の頁 19 ~ 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/10749039.2019.1660789	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Misawa Koichiro	4. 巻 39
2. 論文標題 Nature in Our Experience: Bonnett, McDowell and the Possibility of a Philosophical Study of Human Nature	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in Philosophy and Education	6. 最初と最後の頁 135 ~ 150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11217-019-09700-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 三澤紘一郎・立花幸司・佐藤邦政
2. 発表標題 ラウンドテーブル：教育と徳理論
3. 学会等名 教育哲学会第64回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三澤紘一郎
2. 発表標題 変容・社会化・第二の自然：：哲学の教育的要素と教育の哲学的要素 (ワークショップ：「教育の哲学の新たな可能性を探る」)
3. 学会等名 第52回日本科学哲学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	渡邊 福太郎  (WATANABE Fukutaro)  (80634047)	慶應義塾大学・文学部(三田)・准教授    (32612)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------